区報ぶんきょう　オリンピック・パラリンピック こども新聞　平成30年3月31日

国際交流フェスタで感じた日本のかおり

2月24日、文京シビックセンターで開催された「国際交流フェスタ」に、日本文化の体験取材にうかがいました。

においぶくろ／日本の香り体験

いろいろな香料（こうりょう）、スパイスを入れてつくる「においぶくろ」を体けんしました。40分ほどでできあがる簡単なものでしたが、いいにおいのものができました。同じ木からの香料でも、ぜんぜんちがう香りがしました。

（小4／K・S記者）

香りについておどろいたことがあります。それはインドネシアで発見された香りです。だいじゃがその香りになる木にまきついていて、動物が気に入る木ならば何かいいことがあるかも!!と調べたら熱をさます効果（くすり）があったそうです。くすりとしても効果があるそうで、私ももっていたいです。

（小5／C・Y記者）

はん画体験

かぶとのはん画にしました。いろいろな板でかたおしました。さいごには、ちゃんとかぶとができてよかったです。

（小4／R・M記者）

伝統木版画（でんとうもくはんが）という江戸時代から伝わってきた版画の体験をしました。歌川広重（うたがわひろしげ）の絵なども10色でつくることができます。今回体験したかぶとは4色のみでつくれます。（小4／Y・K記者）

競技かるたを体験することも記者

はんが、スタンプラリーや色々なことをしてたのしかったです。いろいろな人が来ていろいろなことがありたのしかった。またこんなことをしたいです。（小4／Y・N記者）

競技かるた体験

こんかいは、10枚の札を使いました。まず、5枚ずつ好きなところに並べます。次に読み手が札を読みますが、はじめの札は入っていません。次の札から読んだら取り、それを返します。先に札が0枚になったほうが勝ちです。やってみたら、集中しないとできなかったのでとてもむずかしかったです。

（小4／H・S記者）

競技かるたは今、「ちはやふる」の影響（えいきょう）で知名度が上がっています。漫画も日本語のものだけでなく英語のものも出ています。競技かるたには一字きまりや二字きまりなど、下の句が特定できる句があります。聞いた時点で札をはじきとばしていてすごかったです。

（中2／Y・I記者）

交流と体験会を通じて

インタビューでは多くのかたが「とても良いイベントだと思います。もっと増やしてほしい」と言っていました。私たちの知らないこともたくさん体験できていいと思いました。

中でも心に残ったのがにおいぶくろ作りです。色々なふくろの中におもしろい香りのものを入れて色々な楽しみ方があります。シナモンの香りや不思議な香りがあって、子どもからお年寄りまで楽しめるものだと思いました。もっとこのようなイベントを増やして、ポッチャなどのあまり有名ではない競技をみんなに知ってほしいです。文京区にしかできないオリパラのイベントを行うのも良いと思いました。

（小4／Y・T記者）

中国変面（王 文強さん）

パラ水泳・木村選手の講演を聞いて

木村敬一（きむらけいいち）選手

あきらめないでがんばる

3月5日、ぼくたちは木村敬一（きむらけいいち）選手の講演を聞きました。木村選手は小学生以前から目が見えないそうです。でも、外で遊ぶのが好きで、スキーや登山などもしていたそうです。ただ、目が見えなかったので、ころんだりと大変だったそうで、母がプールをやらせはじめたそうです。

中学生時代に東京に来て、つくば大学附属（ふぞく）盲（もう）学校に入って中3で初の世界大会に出て、高校3年生で北京のパラリンピックに出場したそうです。その時は、出場することだけでもうれしかったそうです。大学生になると、「北京パラリンピックでは、何をやったんだろう?」そう考えるようになり、2012年、ロンドンのパラリンピックに出場したそうです。最初の し合は50mクロールでした。その日の朝きんちょうしてしまい、けっか5位でメダルをとれなかったそうです。次のし合は100m平おぎでした。どうしても1位をとりたいと考えて、2位をかくとくできたそうです。あきらめないでがんばっていく根じょう強さが、実をむすんだけっかだなと思いました。

（小4／S・K記者）

リオデジャネイロ大会

木村選手は2016年リオデジャネイロパラリンピックに日本代表として出場され、計5試合で銀メダル2つ、銅メダル2つの快挙を成し遂げました。

リオの1週間は非常に大変なものであったと語っていました。1つは体力面での疲労（ひろう）です。連日試合が行われるため、疲れがたまってしまうとおっしゃっていました。もう一つは精神面での疲労です。前回のロンドンパラリンピックでの結果をふまえ、今度こそ金を!と思い試合に挑（いど）んでいましたが、なかなか金がとれず、コンディションを整えるのが難しかったそうです。1位を、金メダルをとれなかったくやしさは、一生忘れられないけれど、あのきつい1週間を乗り切ったことは自分の中で大きな自信になったそうです。

（高3／R・K編集サポーター）

ボランティアの支え

木村選手は社会人選手として活躍されています。しかし、木村選手もひとりではずっと泳ぎ続けることはできなかったはずです。その裏には必ず支えてくれる人がいるはずです。ボランティアの方々は選手の希望（きぼう）を聞いたり選手がより良い成績を残せるようにしたりしています。そんなボランティアも、ずっと同じ活動をしているだけでは意味がありません。例えば、日本は災害（さいがい）が多い国なので、もし災害があった場合、被災したことのない選手をどのようにケアするのか。また、日本人が大切にしてきた「おもてなし」や「一期一会（いちごいちえ）」の精神をどれくらい伝えられるか。2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて私たちにできることは、まだまだあるはずです。2020年は選手たちの集う場所であり、また「日本人」の心持ちがわかる場所でもあるのです。

（中1／S・N記者）

選手とスタッフのギャップ

選手を取り巻く環境（かんきょう）の変化に関するお話がありました。今までは選手もスタッフも仕事と両立しながら競技の練習をしていました。しかし現在は選手は練習に集中する一方、選手を支えるスタッフは仕事をつづけながら活動しています。選手とスタッフのギャップが大きくなり選手のプロ化をボランティアだけでは支えきれない状況になっています。選手をどのようにサポートしていくかを考えていく必要があると思います。

（高3／K・H編集サポーター）

パラスポーツ体験

VRゴーグルをつけて
パラスポーツを体験

3月4日に東京ドームで開催されたパラスポーツ体験会に参加しました。

この体験会は文京区を本拠地とするプロ野球チームが行っている社会貢献（こうけん）プロジェクトの一つで、震災の子どもたちを元気づける運動会なども行っているそうです。今回は2020年に向けてパラスポーツが広がる活動として、競技を体験させていただきました。

（小5／T・O記者、中1／S・N記者、高3／R・K編集サポーター）

アンプティサッカーについて質問しました

アンプティサッカーというスポーツのルールはかた足がない人たちが松葉づえを使ってボールをけり、うでがないゴールキーパーがゴールに入れないようにするというルールです。

（小4／C・K記者）

プロ野球選手とパラスポーツ体験

アンプティーサッカーはFC（えふしー）アルボラーダの選手が来て、実際に重信（しげのぶ）・辻（つじ）・北村（きたむら）・大城（おおしろ）選手とサッカーをやり、選手は運動神経が良いなと思いました。ポッチャは、リオ銀メダリストの杉村（すぎむら）選手が来て、ボールを上にのせる技が決まりませんでしたがプロってすごいなと思いました。実際に吉川（よしかわ）・中井（なかい）選手などとポッチャをしました。大技を決めたり、ふざけてイエローカードと言われたりして白熱していました。また参加したいです。

（小5／Y・A記者）

オリンピック・パラリンピックこども新聞
記者＆編集サポーターを募集します。詳しくは下記の担当までお問い合わせください。